

ソネット集を序章とするシェイクスピアの審美への変節

—— 宮廷風恋愛の伝統とシェイクスピアのパリノード ——

池 上 賀英子

Shakespeare's Turning Round from the Tradition of Courtly Love

—— The Meaning of his 'Palinode' in *The Sonnets* ——

Kaeko IKEGAMI

1. シェイクスピアの変節

昔は黒い色は美しいとは考えられず、
考えられたとしても美の名称ではなかった。
だが今や黒は美の後継者となり、
かつての美は庶子の汚名を着せられている。
誰もが自然の力を手に入れ、
人工の偽りの顔で黒を白に変えるようになって
からは、
美しい美は名声もしらず聖なる社も持たず、
屈辱を受けることこそ無いがその神聖さは汚さ
れている。
それで私の恋人の目は鴉のように黒色で、
顔もそれに似合った同色だが、みんなして喪服
を纏い、
生まれながら色白の美を欠きながら偽りの評価
を下して
自然の創造を冒瀆しているものたちを嘆いてい
るようだ。
だがその嘆きぶりが悲しみを美しくしている
ために、
美はそのような色であるべきだと誰もがいつ
ている。(127番)

But now is black beauty's successive name; (1.3)
で開口し Therefore my mistress' eyes are raven
black, / Her brow so suited, (11.9-10) と意気を感じ
て打ち上げて、 That every tongue says beauty
should look so. (1.14) と審美への変節を提唱する。

こう歌いだされて127番から始まる、いわゆる「ダ
ーク・レディ・シークエンス」をT・ソープのオー
ダーに添って154番へと辿って行くとき、詩人シェイ

クスピアの美と愛の伝統に対する思案と反問の道程
が見えてくる。

公認されていた美も愛も、ルネサンスのネオ・プ
ラトニズムというキリスト教精神と折り合いをつけた
時代の思想によって援護された——C・S・ルイス
の注解した「誤解されたオヴィディウス⁽¹⁾」、否シェ
イクスピアの眼にはむしろ、「オヴィディウスを公然
と誤解する」ことによりエスタブリッシュたりえて
いた「隠れ遊び⁽²⁾」——つまりは、「宮廷風恋愛」の
伝統という審美観の範疇で存在していた。

この審美観の伝統上で安心立命し形骸的に称揚さ
れていた、'Fair and cruel Lady'への'Knight'の捧
げるソネットの審美観を眼前に見据えて、シェイク
スピアは 'In the old age black was not counted
fair,' と念を押し、その裏面から 'And beauty slan
der'd with a bastard shame' と美の通念に審判を下
し、黒の美を認識し賛美すべきことを宣言する。そ
して前代未聞のソネット129番において、断じて
'fair' ではない「世俗の愛」の虚妄のメカニズムを冷
徹に客体化してそのどす黒い passion を追いつめ、自
己を証人とすることによって、'All this the world
well knows: yet none knows well / To shun the
heaven that leads men to this hell.' と、愛と美の否
みようのないリアリズムに隷従していく覚悟を声明
する (129番)。その行動化への口火として、審美の
伝統へのシェイクスピアの上質の喜劇的意識による
一種のパロディとして、その実シェイクスピアの大
真面目な悲劇的文脈におけるアンチテーゼとして、
特筆されるソネット130番を声高に打ち上げる。恋慕
する女神の実在化として、愛を媒介する真実の存在
である肉体という自然を賛美の俎上に揚げ、その一

一つの真実と実在性を承認して行く。賛美を捧げる現在している身体の個々の黒を自他に念を押していくことによって、愛とは現実のものでなければならないことを主張する (130番)。

私の恋人の眼は少しも太陽に似ず、
珊瑚の方が彼女の唇よりも遥かに赤い。
雪が白なら彼女の胸は薄黒く、
髪が針金なら彼女の頭には鉄の針金が生えている。

赤と白の薔薇を見たことがあるが、
そのような薔薇を彼女の頬に見ることはない。
また私の恋人の吐く息よりも、
更に芳しい香りなら他にもある。
彼女の声を聞くのは好きでも、
音楽が遥かに快いことはよく知っている。
女神の歩く姿はまだ見たことはないが、
私の恋人は土を踏んで歩いている。

だが嘘の喩えで描かれたどの美女にも劣らず
私の恋人は類希な女だと私には思えるのだ。

(130番)

かつては'fair'であった'beauty'として、シェイクスピアがソネット詩歌の愛と美の主題に据え各々の美のコンヴェンションにおいて以上のように対峙した、この「宮廷風恋愛」について、ここで、改めて淵源から問わなければならない。

2. 宮廷風恋愛の伝統

「宮廷風恋愛」というこの用語は、中世フランス文学の碩学ガストン・パリシによって1887年、*Romania*誌Ⅻ号、クレチアン・ド・トロアの『ランスロ、或は荷車の騎士』の中で初めて'cet amour courtois'と使われ、それは今世紀の歴史家シャルル・セニョボスによって「恋愛、この十二世紀の発明⁽³⁾」と名言されているように、十一世紀と十二世紀のvarietyに南仏の抒情詩人 (Troubadours) たちによって生された文芸の新様式であったのみならず、西欧文化史においてかつて存在したことの無かった心的態度をも表示しているものである。このプロヴァンス語の'fin 'amours'「至純の愛」または「雅の愛」は、中世ヨーロッパの宮廷を中心にした若い騎士と既婚の貴婦人との間の恋愛であるゆえに「騎士道的

恋愛」とも呼ばれ、この愛の観念はヨーロッパ中世後期の世俗愛の倫理の中心として近代以降における Romantic loveの源流となり、今日へその影響は受け継がれて来ているものである。その意味において、確かに、ルイスの言葉をして「我々の倫理、想像力、日常生活のことごとくを変革し⁽⁴⁾」たであろうもの、それに比べたら「ルネサンスなどは文学の水面を騒がすさぎ波にしかすぎない⁽⁵⁾」革命であるとする言われるべきものである。「謙譲」(Humility)「礼節」(Courtesy)「姦通」(Adultery)「愛の宗教」

(Religion of Love)⁽⁶⁾という言葉で説明される特徴を持つ高度に特殊化されたこの愛においては——恋人は常に惨めな存在であり、彼の愛する貴婦人の願いならどんな気まぐれであっても遂行し、不当な譴責には黙って耐えるのが彼に許される唯一の美德とされる。恋人は貴婦人の「家来」であり、彼は彼女のことを'midons'と、その言葉の語源における「奥様」ではなく「ご主人様」と呼ぶ、「愛の封建化」とも呼ばれる厳かな愛の儀式そのものが、宮廷風生活の主題であった——このような情緒を特徴としているプロヴァンスの恋愛歌は、中世後半の恋愛詩へまたそこからペトラルカやその他多くの詩人たちを通して、今日の恋愛詩へ、紛うかたなく通底している。

それでは、女性を至福の源泉とし憧憬と崇拝の念を持って意中の既婚の貴婦人に奉仕する歓喜を歌う、このような南仏トゥルバドゥールの「至純の愛」の概念が、エリザベス朝英国へ、シェイクスピアへ、至る経路と行程が確認されなければならない。

その過程として、南下してイタリアに向かい、グイド・カバルカンティを始めとする清新体の詩人たちを通してダンテ、ペトラルカやボッカチオらに偉大な影響を与え、他方、アキテーヌ公ギョーム九世の孫娘のエレアノール・ダキテーヌが1237年、十五才でフランス王ルイ七世と結婚することに伴って、この南仏の恋愛観は北仏の抒情詩人 (Trouvères) に受け継がれ倫理的に規範化されていく。以後南仏で生まれた'fin 'amours'はここ北仏から英国に移行していくことになり、さらにはドイツに伝播してミンネジンガー (Minnesinger) を排出することへと続いて行く。つまり「宮廷風恋愛」の北仏から英国への通行は、エレアノールが、後に十一才年下のアンジュウ伯アンリー (後の英国王ヘンリー二世) と三十才で再婚することによって、一代で英仏二か国に及

ぶ女王として渡英することに拠る。その際に、トゥルバドゥールの中で最高の詩人といわれたベルナル・ド・ヴァントゥールを伴ったという説まである。

この後、ルイ七世との間に、長女マリー、次女アリスを、ヘンリー二世とは五男三女八人をもうけたエレアノールは、夫ヘンリー二世との愛情の確執から後のリチャード獅子心王一人を連れてフランスに帰国し、以来彼女自身のポアティの宮廷サロンのみならず、彼女の二人の娘であるブロワ伯爵夫人アリスととりわけシャンパーニュ伯爵夫人マリーの宮廷は、まさに北フランスの文学サロンの中心的存在となる。それらの宮廷には、ヨーロッパ中世の恋愛指南書“De Amore”の著者であるアンドレーアス・カペラーヌスやこの宮廷愛の観念をアーサー王物語の騎士達を題材にしたロマンスの中で扱ったクレチアン・ド・トロワ等が集まったとされているし、またしばしば「恋愛評定」も行われていた。C・S・ルイスもこの伝播経路と発展について次のように示唆している。

十二世紀の終わりまでに、プロヴァンス風の愛の概念は、誕生の地から二つの方向に広がっていった。一つの流れはイタリアへ下り、甘美な新詩体 (Dolce Stil Nuovo) の詩人達を通して、神曲という偉大な海をふくれ上がらせ、少なくともそこで、キリスト教と愛の宗教との間の争いに終止符を打たせることとなる。もう一つの流れは北へ向かい、すでにそこに存在していたオヴィディウスの伝統と混じりあい、十二世紀のフランス詩を生みだしていくこととなる。そして我々が次に目を向けなければならぬのは、この詩の方向である⁽⁷⁾。

さて、この地に到って特記しなければならないことは、前述のように南仏プロヴァンスに起源するこの‘amours’の観念をいわゆる‘ロマンス’という中世の文学ジャンルの中に肉化させたのがクレチアン・ド・トロワであり彼の『ランスロ』 (“Lancelot”) はルイスも云う「フランスにおける宮廷風恋愛詩の初期の完成を示す精粹である⁽⁸⁾」とすれば、他方、その概念を著書“De Amore, sive De Alte Honeste Amandi”によって理論づけ法典化して一種の恋愛

解義書に仕立て上げたのは、同じくシャンパーニュ伯爵夫人に関係する宮廷付司祭アンドレーアスであったということである。何よりもアンドレーアスの解義する「この恋愛観は、以後のヨーロッパ中世の伝統的な俗語による恋愛抒情詩やロマンスに及ぼした影響は計り知れなく、単に中世の恋愛観のみならず当時の上流階級の風俗習慣を知るためにも極めて貴重な資料となる作品とされる所以である⁽⁹⁾」と、アンドレーアスの原書の訳者瀬谷氏はその書の歴史性を認識している。C・S・ルイスは「それはアンドレーアスが何を考えていたかを告げるものではない。だがこのような意見が、この問題についての流動的な意見の総体の一部であったことを示す、かなり良い証拠にはなりうる⁽¹⁰⁾」と付言し、この著を通して当時の一般の人々が考えていた愛の理論の特徴を知る上でも、この書の意義を重視している。

アンドレーアスのこの中世ラテン語で書かれた書物は、『宮廷風恋愛について』(瀬谷幸男訳) という邦名の訳書によって、又John Jay Parryの英訳Andreas Capellanus, “The Art of Courtry Love”とその邦訳『宮廷風恋愛の技術』(野島秀勝訳)を通して、その知識を得ることができる。

全体は三巻からなるこの書の、まず第一巻の「恋愛の手引き」においては恋愛の定義とその効用について、更に平民、貴族、王候など大貴族階級の男女の組み合わせによる個別の口説きの作法が問答形式で語られる。愛の定義では、「愛とは美しい異性を見て、極端に思いつめることから生まれる一種の生得の苦しみである⁽¹¹⁾」と、ギリシア・ローマの同性愛が中心の愛との本質的相違が明示される。そしてこの雅の愛の効用においては、「恋愛は野卑な者を洗練させ、生まれの低い者を人格の優れた人に、傲慢な者を謙虚に、愛する者は如何なる人にも親切に仕え、愛人をあらゆる美德で飾り、ただ一人に貞潔を捧げる⁽¹²⁾」とする、まさに宮廷風恋愛の倫理的作用の側面を余すところなく喝破している、と恋愛の存在基盤を説いている点をまず瀬谷氏は証認する。「宮廷風恋愛」という愛の儀式を一種の疑似宗教の形式として描いて行き、それに殉じることを説諭していく。続く第二巻は八章においてこの書の中核を成す「三十一か条の恋愛法典」(Regulae Amoris) が掲載される。二巻に渡る恋愛指南の大団円として、ブリテンの騎士が「恋の王」の代理に持ち帰った凡ての恋人

が忠実に守るべきことであり、これを守る者はその褒美として「恋」を与えられ、もし違反すれば罰を受ける、「恋の神」の掟を世々限なく布告して、その結論とする。恋愛評定（当時の上流社交界における雅な遊戯）に際して判決を下す拠り所とした法規でもあるこの「恋愛法典」三十一か条の存在意味について、瀬谷氏はJ・ラフィット・ウサの説を紹介し、「粋の道と恋愛に関する事柄について、十二世紀の思想、世論、感情、及び慣行を教義論的形式で表明したものであり、この時代の恋愛形而上学の原理を定めた抽象的な法規で、トゥルバドゥールの詩にも、クレチアン・ド・トロワの物語の中にもその教義の適用や例証を見ることができるものなのである⁽¹³⁾」という。それら愛の諸法規の中でも、論旨と直結する、第一条「結婚は恋愛を妨げる心の口実にはなりえない」と第二条「嫉妬しない人は愛することができない」と第二十一条「真の嫉妬心は愛情をより大きく育む」とする情熱的愛のこれら三か条の掟は、まず、「宮廷風恋愛」は、結婚愛とその美德とは無縁の存在であることを提示している。さらに法典中に記されている愛人の「恋わずらい」(malady of love)の兆候として、「顔が青ざめる」「心が震える」「不安にかられる」「食欲がなく眠れなくなる」「不安と疑念を抱く」などの、「慈悲なき美女」(La Belle Dame sans Merci)への「愛の訴え」(Complaint d'Amour)のコンヴェンションに、第十三条「愛は公に知られたときには長続きしない」と説く愛の秘密性と、第十四条「容易に恋が得られる時にはその価値はなくなり、困難な時にその価値が高まる」とする達成の困難性とを加算し、最後に打ち止めの条件として、第三十一条「一人の女性が二人の男性に、一人の男性が二人の女性に愛されることを禁ずるものは何もない」を付加すると、以上の総計を違法する愛とは本性的に「姦通愛」が充当していることが確認されてくる。それゆえに、社会と宗教に罪悪であることが逆説として表明されているところでもある。このことはこの時代の人間には恋愛と結婚は二元論であった事情を浮上させる。封建社会の貴族の結婚は愛とは無縁の政略結婚であり、つまるところ妻は夫の財産の一部であるにすぎず無用になれば容易に離婚にいたるものであったこと。他方で、「至純の愛」にのみ殉じる情熱愛はそのこと自体が悪であるゆえに、愛への制約は自分の妻にも同様に裁定さ

れるものであったということ。「宮廷風恋愛」の存在と意味は、このように多面体として二律背反するこれらの熾烈に闘ぎ合う、危うい無干渉地帯にあるといえる。つまり、社会組織を成す封建体制も精神組織を成すキリスト教の教会も、この愛の形式を愛憎並存的に認知することで曖昧な共生を保っていた、と評価されざるをえないものである。

アンドレーアスも、続く第三巻で「愛の否定について」と題して、前二巻とは全く異なる辛辣な論調で、姦通を基盤としている「宮廷風恋愛」とその愛の信仰の対象としての女性に対する厳しい批判を矢継ぎ早に浴びせ始める。女性を攻撃し風刺し恋の愚かさを述べ、現世の愛を捨て神の愛への信仰に生きることを勧める、いわゆるパリノード（「取り消しの詩」）の巻を完備している。彼が今まで述べてきた愛の技巧や原理を捨てて、天上の神に仕えるべきだと述べていく、慣習的な文学形式である「^{リトラクション}撤回」を加える。このように、今まで世俗的虚栄心で書いてきた自らの作品を否定したり、地上的恋愛の書の宗教的取り消しなど、チョーサーへ、オヴィディウスへ、さらに古代ギリシアへと遡行し得るパリノードを、作品の最後につけ加えることは、中世の創作活動のコンヴェンションの一つであるが、殊アンドレーアスのこの豹変について、諸説ある現実の差し迫った理由のゆえであるにせよ、ここで注目しておくべきことは、この全く価値の対極にある愛の概念とその二つながらの共存という事実である。つまり「宮廷風恋愛」の観念に関しても、いわゆる中世的「二重真理」の、ルネサンス的「対立」ではなく、「共存」と「共生」である。姦通恋愛であるこの「宮廷風恋愛」は、キリスト教的倫理観に照らせば罪悪であり果ては異端である一方で、人間の自然に基ずいた現世の美德の源泉となりうる本性のものである。そして、この愛の理論の著者であるアンドレーアス自身もまた、第三巻を書く神を畏れる敬虔な牧師である一方で、侯爵夫人マリーの命令によって恋愛の書を書いた、十二世紀終わりの一人の宮廷人でもあったという点である。

そしてもう一人の中世最大のロマンス作者とされるクレチアン・ド・トロワも、マリ・ド・シャンパーニュ伯爵夫人の庇護下でアーサー王伝説に基づく宮廷風騎士道物語に新領域を開拓しつつも、このアーサー王伝説に初めてキリスト教の倫理とその神秘

思想を導入した点が注視されておかなければならない。シャンパーニュ伯爵夫人の命令によりトゥルバドゥールの称える'fin' amours'即ち、「姦通」と「至純の愛」をテーマに『ランスロ、或は荷車の騎士』のその大半で、騎士の不名誉をも甘受し貴婦人の不条理な命令にも盲従する、愛に殉じる姿を描きあげていくのであるが、この詰まる所「御抱え詩人」であったクレチアンをしても物語を「恋の神」への呈身を説くこの文脈で完結させることはできず、途中で筆が折られている事である。南仏プロヴァンスで生まれた'fin' amours'は南欧的な情熱に支えられた官能的な快楽を伴う一種の「恋愛審美学」的要素を持つが、北仏に移ると倫理の問題が意識されるようになり、クレチアン・ド・トロワの作品全体にあらわれる「結婚愛」(amour conjugal)や、宿命的な恋の情熱を歌う死に至る病としての「情熱恋愛」(amour passion)等、「恋愛倫理学」なものに変質している。つまり北仏の愛の理論家アンドレアスにおいてのみならず、このロマンス作者にもまた、「雅な結婚愛」(courtly conjugal love)の中に一層に愛の理想を思案しようとしていく北仏の「愛の倫理変質」を認識することが肝要であるといえる。

この文学の伝統の中で、十三世紀フランスにおいても、寓意と教訓文学の傑作である『薔薇物語』("Le Roman de la Rose")は生まれる。ギョーム・ド・ロリス(1200?-1240?)とジャン・ド・マン(1235/40-1305)によりそれぞれ書かれた二部から成り立っているこの物語は、1230年ころにギョーム・ド・ロリスの手に成る八音節詩句4058行の第一部では、理想主義的「雅の愛」の擁護者であるギョームの本領として、寓意と擬人法を巧みに駆使しながら恋愛心理の機微を分析し、いわゆる「愛の技法」なるものが繊細な文体で描写されている。他方、1275-80年ころにジャン・ド・マンによって書き継がれ17722行にも達している第二部は、その内容も第一部とは著しく背反して当時の新興市民階級の批判精神や反女性主義等の反抗精神に貫かれている。恋愛も結婚も種の保存という生殖を目的にした現実的性愛を提唱している。この第二部の女性攻撃は当時の知識人の間に大反響と論争を引き起こしたが、この物語の影響が中世末の貴族的恋愛観を決定づけたことはJ・ホイジンガによって指示され⁽¹⁴⁾、それが以来三百年英国E・スペンサーの時代に至るまで文学作品としての

画期的な意義と影響を与えたことは、処々指標されている。ルイスも、「(先祖の場合に比べたらはるかに度合いは少なくなっているが)我々が女性をからかうとすれば、それは婦人崇拜のなごりがまだすっかりなくなっていないためである。だからジャンが風刺として選んだ対象そのものは、伝統に従ったまでにしかすぎない。恋愛詩を女性風刺と結びつける点においても、彼は伝統的な路線——オヴィディウスや『総会』、アンドレアス・カペラヌスの路線——に従ったまでに過ぎないのである。⁽¹⁵⁾」と『薔薇物語』のジャンの第二部の「宮廷風恋愛」の伝統における通底性に言及し、重ねて、「彼はしっかりと伝統に倅さしていたのであり、革命を起した人間ではない。彼は一方ではオヴィディウスやアンドレアスを回顧しつつ、他方では(パンダルスが否定的側面を提供している)チャーサー、(ダイナダンの地位を考えられているよりも理解していた)マロリー、(ドットフリー・ゴビーリーヴを想像した)ホーズからソネット連作における毒舌的要素に至るまでの未来をも見通しているのである。⁽¹⁶⁾」と後世への道筋に解説を加える。

このように「宮廷風恋愛」の伝統は、続いてチャーサーが『薔薇物語』を自ら翻訳を手がけたことから、チャーサー自身の作品群の中へ受け継がれながら、愛の観念は時代と英国の風土と習慣によって変容しつつ、更にチャーサーの創作意図の中でチャーサー独自の解釈となり、英文学の特質を支えていくことになる。『薔薇物語』は単なる翻訳書として孤立させて考えるものでは元より無く、ギョーム・ド・ロリスによる愛のロマンスの貴族的な趣味と整った形式とジャン・ド・マンのより庶民的な態度と風刺と批判によって成された、宮廷愛のイデオロムは、チャーサーの人間理解と彼の上質の風刺と批判を加えられることによって新生を得て、スペンサーへ、シェイクスピアへ、影響を伝播しながらそのデリケートな発展と展開を示していく。シェイクスピアへ、しかも、とりわけシェイクスピアのソネット連作帯における愛のアーギュメントに到る時、「宮廷風恋愛」の英国における伝統に及したチャーサー的変容を確認しておくべき大用が、ここで、最後に生じてくる。吉田新吾氏の『チャーサー研究』に拠ると、英国における「宮廷風恋愛」詩人としてチャーサーの果たした役割は、「宮廷風恋愛」の反社会的姦通恋愛

の側面を止揚して結婚と結合し、結婚即恋愛、夫婦即愛人という愛の形を確立したことであり、「宮廷風恋愛」のロマンチズムとリアリズムを融合させ劇的效果を上げ、「宮廷風恋愛」の詩をもって中世ヨーロッパの詩の慇懃、優雅さの理想を英詩に導入し、英文学の水準をフランス文学のそれまで押しあげ、英文学において「宮廷風恋愛」から浪漫的恋愛へと連続する伝統の源流となったことである⁽¹⁷⁾。そしてチョーサーを起点として、この後「ルネサンス期の浪漫的恋愛は精神化と官能化を経て、新プラトン主義の影響のもとに愛の理念を消化させたE・スペンサーのいわゆる精神的で浪漫的な恋愛、P・シドニーに代表される感覚的な浪漫的恋愛、C・マーローの『ヒアローとリアンダー』やW・シェイクスピアの『ヴィーナスとアドーニス』などのイタリアン・エロチズムの影響を受けた官能的な浪漫的恋愛の三つの形に、それぞれ分化して行く⁽¹⁸⁾」と指摘されている点も、認識下に入れておくべき処である。

遙か時と所を隔て、プロヴァンスで生まれた恋愛抒情詩の愛の理念と技法は、大要として、以上のような伝統と変容を携えてシェイクスピアに引き受けられていくことになる。シェイクスピアにおいても愛の伝統は引き続き、彼の初期の『ロミオとジュリエット』に象徴される純愛への探求から問題劇の時期の『トロイラスとクレシダ』に集約されてくる愛への疑心と批判へと、『ソネット集』において彼の愛の主題は伴奏されて、変容し、深化し、最後にはシェイクスピアの「インテグリティ」ともいえるべき「愛への苦渋」が垣間見えるにいたる。

今一度愛の伝統を遡航し咀嚼することによって、シェイクスピアが変節を英断し逆転の発想から再構築を試みながら、詰まるところ苦渋するより他のなかつた、宮廷風恋愛の愛の伝統に内在され続けてきた矛盾と功罪を把握しておかなければならない。

3. シェイクスピアのパリノードと宮廷風恋愛の功罪

「愛と美」を直接テーマとする十四行詩を、イタリア風（ペトラルカ式）詩形式から英国風（シェイクスピア式）詩形式へと変革し、詩想を三つの四行句で展開させ最後の二行句で結句として帰納させる、個個のソネットが独立した完結体であり、更にシークエンスを持たせることで詩人の「愛と美」のアーギュメントは立体化し或る種のストーリーを持ち、

その意図が展望されてくる。シェイクスピアの『ソネット集』は1590年から書き始められ1593-6年にその大部分が、そして1599年から再び書き加えられ1603年に至って創作されたと推定されている154個のソネット連作であるが、多少の差異は有るにせよE・K・チェインバーズ説⁽¹⁹⁾を中心にしたこの創作年の論拠とされている彼の劇作品における『ソネット集』との類似例数が、シェイクスピアの全作品に対する『ソネット集』の位置と存在意味を示唆するものと筆者は理解し論を進める。『ソネット集』の大部分が『ヴィーナスとアドーニス』と『ルークリースの凌辱』に現れた叙情的衝動の継続した作品⁽²⁰⁾であるとするチェインバーズの判断はもとより、とりわけ「愛」を主題としている、初期の劇『ヴェローナの二紳士』、『恋の骨折り損』、『ロミオとジュリエット』、『真夏の夜の夢』のグループと後期の『ハムレット』や『トロイラスとクレシダ』のグループにおいては、他作品においてよりも『ソネット集』との類似例数の数値が全体的平均数値に格段勝っていることも例証されている。シェイクスピアの『ソネット集』とは、ワーズワースの言にいう「彼の心の鍵を解いて見せた」ものであれ、ブラウニングの「それでは、なおのことシェイクスピアらしからぬ」と皮肉されるものであれ、換言すれば、『ソネット集』で展開されている「愛と美」が人間シェイクスピアの経験に基づくものであれ劇作家シェイクスピアの全くの虚構であれ、154の連作帯で創り出されている「美」も「愛」もシェイクスピアの意識下において成されたものであり、彼の三十七の劇作品に、接近した距離を保ちつつ、常に伴走された存在であったということ、この点は再度認識しなければならない。

さて、チョーサーからスペンサー、シドニーを通り、英国風に倫理的にも洗練されて、シェイクスピアへ手渡されて来た「宮廷風恋愛」の伝統は、彼の『ソネット集』の「ダーク・レイディ・シークエンス」に到つて、ある種の先祖返りとも云い得る暴力的な迷走を開始する。127番から次第に具体性を増して154番まで詩い重ねられていく「黒い女」との「黒の美」の賛美を媒介として誘引されるどす黒い恋愛は、紛れもなく「宮廷風恋愛」の原型をなす「姦通愛」でありながら、「至純の愛」の存立基盤であったあの「雅の愛の効用」である「謙譲」も「礼節」も

その質において変容し、延いては「愛の宗教」に殉じることによって生まれる恋愛の倫理的効用である「上昇」にも無縁の、「避ける術のいまだ知られていない」性愛に繋がれた「世俗の愛」に外ならないものであった。それでも、146番に至るまでは、北仏を経て更に英国化されてきたことに因って体得されている倫理的煩悶が、表現の手を替え品を替え、堂々巡りで繰り返されつつも、この愛と美を正当化する一点へと自己の眼と心の軌道を修復することを決意させていく。しかしながら146番で、「この愛から逃れるには肉体の死滅をもってなすべきこと」を表明して、これに先立つ一切を否定する「シェイクスピアのパリノード」に到る。続けて147番では、「私が美しいと言い、光り輝いていると考えた君は、その実、地獄のように黒く、闇のように暗い」と、自らの審美観の黒白の変節に判決を下した。しかしながらシェイクスピアのソネット詩形による恋愛審美論はここで伝統的に詩い終えられず、148番で「太陽でさえ空が晴れていなければ見えないのだ」と自己弁明を開始してパリノードの決意を曖昧にし始める。149番へ150番へ決着のつかない自己憐憫と冷酷な女への憑依的執着の吐露をして151番へ直進し、神も知らず良心も問わず「黒い美」に隷従し「真っ黒い愛」に溶解することを哀願している自己の本心を醜悪に戯画化しつつ認知する。152番に、「黒い女」の黒い実体を見届けたことを愛憎並存的に脅迫とすることで、引かれ者の小唄さながらに、最期の一矢で自己の恋愛の存在証明を刻みつけてみせる。宮廷風恋愛詩の伝統である「パリノード」で歌い納めず、美と愛へ偽証という大罪を冒した自己の眼と心を懺悔し悔い改めた「シェイクスピアのパリノード」を二重に取り消し、自虐を縋い交ぜ、ダイアナ女神の貞節を冷笑しヴィーナスへの同伴を眷属性とするキューピッド神にのみ殉じる宣誓を二度重ねて、「ダーク・レディ・シークエンス」の結句とした。

事ここに到っても、「シェイクスピアの『ソネット集』は恐ろしい詩集である」と呟く嘆息にも、「度を越した、的を外れた愛情に伴う弱さ、愚かしさ⁽²¹⁾」のゆえに「シェイクスピアはこんな詩を書かないほうが良かったのだ⁽²²⁾」とのヴィクトリア朝人の拒絶感にも、殊『ソネット集』における愛の場合にはそれでも共感がそそられてくる。二人の男性の愛の関係に一人の女が絡まり、二人の男とそれぞれに交渉

をもつ、用意ならざる愛の構図から異端のエロス神への最終の誓願にいたる『ソネット集』の愛の全容において、人間の奥に潜む醜さ、弱さ、愚かしさ、を、シェイクスピアが怯むことなく露わに曝し出していく。人が傷つき傷つけられ、騙し騙され、嘲けり嘲けられ、それでもこの愛から立ち去れぬ、と告白する。

虚構であれ真実であれ、『ソネット集』におけるシェイクスピアの「パリノードの冒瀆的撤回」によって果たされてくる意義とは、十二世紀に文芸の形式となって公認された「恋愛」とその伝統のシェイクスピアへの伝来経路を確かめていく大半の試みと平行して既に知覚されたことでもあるが、南仏プロヴァンスで生まれた粗野な‘fin’amours’が「宮廷風恋愛」として社会と宗教の体制の下で成り立ち、長途の時間と空間において存続するために、徐々に、強かに、取り込み倫理的洗礼と視なされてきた恋愛社会力学を、「愛」そのものの「混沌の真実」でもろともに「審判に下る」ことを試みているといえる。

暗く醜い現実の愛の中で苦渋し深く傷ついても、憎悪で読み替えて修復に向かい代替の愛によって補修を施す術など行使しない。愛の真実を拭い消すことの不可能を知るゆえに、記憶の彼方へ追いやることなどしないと覚悟を決めて、どす黒い愛の葛藤の中で、愛の神の恐るべき途方もない不条理に敗残の身を晒すとも、愛の尊厳を犯すことは許さない一点において自己の心の真実に殉じる。

もとよりそれは、慣習的な道德律を破るまいとする姑息さからも窮屈な姿勢からも、隔絶している。永遠の不滅の魂の愛の詩を歌いあげたあのダンテもペトラルカも、ベアトリーチェを崇拝しながらこの世でのダンテの愛は妻との間に幾人もの子供を持ち、ペトラルカにいたってはイタリア語韻文とラテン語散文の両方で自分の誉れも英知もすべてラウラゆえといいつつ、彼が一人の娼婦と同棲していた事実是有名であり、しかも本心において猛烈な女嫌いであることも公言している。

Foemina... verus est diabolus, hostis pacis, fons impatientiae, materia jurgorum qua caruisse tranquillitas certa est.

女は…まことの悪魔にして、平和の敵、いらだち

の源泉、くびきの素材なるぞ。それなかりせば、
確固たる平安あるべし⁽²³⁾。

体制者側の騎士道イデオロギーの表現の一つである反キリスト教徒的「宮廷風恋愛」も、聖職者側の認知し布教する「聖母崇拜」信仰も、表面上、女性は優位にあるように見える。しかし、繰り返すところであるが、中世における脱構築の現象であるはずの前者において、「姦通愛」である「宮廷風恋愛」は、結婚制度への違反とその保持という二重性で成り立っていたものであり、ジョルジュ・デュビーも『女性・愛・そして騎士』においてこの「騎士道的愛」の内実について分析的に説明している。

このゲームはあくまで男たちのゲームなのであり、仕掛けているのは領主その人であり、彼は自分の妻を引き渡すふりをして、彼女を一種の疑似餌にしているのである。妻を賭けたこの競技は、彼が若者たちの集団の手綱をうまく取ることを可能にしてくれるし、若者たちは彼の家を栄誉をたたえてくれる。確かに欲望がこの「宮廷風恋愛」をかきたてているものだとしても、それは男の欲望であり、それ以外ではない。宮廷風雅の愛においては、結婚より以上に、貴族の女性はものとして対象化されているのである⁽²⁴⁾。

後者の、もう一つの十二世紀の「発明」である「聖母崇拜」も、現世的愛の流行様式を逆用しての、衰えかけた教会の勢力の挽回を策したカトリック教会の巧緻な所産であり、同時にそれはカトリックの修道院に籠もる男たちの強力な禁欲主義から創り出された苦肉の策であり、彼らの女性蔑視の裏返し表明に外ならない。トゥルバドゥールの詩によって、古代ギリシアとプラトンの愛からの締め出しと、古代ローマとオウィディウスの無視と愚弄からは、救済されたとはいえ、カトリシズムもスコラ哲学も女性はイヴの末裔であり、諸悪の根源、絶えざる誘惑者として警戒の目を光らせながらも、教会は種の保存のための必要悪とみなし、女性を結婚の秘蹟の中に閉じ込め、その挙式の仲介をすることで不承不承認めてきた。

この「姦通愛」であるゆえに幾重にもその功罪を孕んでいる「宮廷風恋愛」とその伝統における矛盾

懂着については、この後改めて取り組まなければならない大論点である。この研究のここにおける結びとしては——先刻のように、一手着手し一步踏み出すやたちまち遠大に俯瞰されて見えてくる愛の伝統と形式における「欺瞞」と「逃避」の巧妙なメカニズムに対して、無謀極まりない自爆的運命をかけての「意義申し立て」にして「愛という聖域」への「身を挺しての警告」であることこそ、『ソネット集』におけるシェイクスピアの「パリノード」とその「撤回」の意義であったといえる。

[テキスト]

- 1) Rollins, H.E., ed. *The Sonnets*. (A New Variorum Edition of Shakespeare) (Philadelphia London: J.B. Lippincott company, 1944)
- 2) Pooler, C.K., ed. *The Sonnets*. (Arden Edition) 2nd rev. ed. (London, 1931)
- 3) Booth, Steven, ed. *Shakespeare's Sonnets*. (New Haven: Yale U.P., 1977)
- 4) Wilson, Dover, ed. *The Sonnets*. (London: Cambridge U.P., 1981)
- 5) Ingram, W.G., Redpath, Theodore, ed. *Shakespeare's Sonnets*. (U. of London P., 1964)
- 6) Rowse, A.W., ed. *Shakespeare's Sonnets*. (London: Macmillan, 1964)

[参考文献]

宮廷風恋愛に関する主要参考文献

- 1) Bourin, Jeanne, *Cour D'Amour*. (Paris: Edition Seghers, 1986) ブーラン『愛と歌の中世』小佐井伸二訳 (白水社, 1989)
- 2) Castiglione, Baldassarre, *Il libro del Cortegiano*. (Milano: Garzanti, 1981) カステイリオ『カステイリオーネ 宮廷人』清水、岩倉、天野訳 (東海大学出版会, 1994)
- 3) Davenson, Henri, *Les Troubadours*. ダヴァンソン『トルバドゥール』新倉俊一訳 (筑摩書房, 1985)
- 4) Duby, Georges, *L'Amour et la sexualité en Occident*. (Paris: Société d'Édition Scientifiques, 1991) デュビー『愛と結婚とセクシュアリティの歴史』福井、松本訳 (新曜社, 1993)
- 5) Elias, Norbert, *Die Höfische Gesellschaft*.

- (Darmstadt und Neuwied: Hermann Luchterhand Verlag, 1975) エリアス『宮廷社会』波田、中埜、吉田訳 (法政大学出版局, 1993)
- 6) Gorton, Theodore, *Ibn Zaidūn and the Troubadours*. (Oxford: Triniy Term, 1973) ゴートン『アラブとトルバドゥール』谷口勇訳 (芸立出版, 1982)
 - 7) Guillaume de Lorris et Jean de Meun, *Le Roman de la Rose*. ギョーム・ド・ロリス ジャン・ド・マン『薔薇物語』篠田勝英訳 (平凡社, 1997)
 - 8) Huizinga, J., *Herbst des Mittelalters*. (Knoners Taschenausgabe) ホイジंगा『中世の秋』堀越孝一訳 (中央公論社, 1988)
 - 9) Lewis, C.S., *The Alegory of Love*. (London: Oxford U.P., 1936) ルーイス『愛とアレゴリー』玉泉八州男訳 (筑摩書房, 1984)
 - 10) Lilar, Suzanne, *Le Couple*. (Editions Bernard Grasset, 1936) リラル『愛の思想』岸田秀訳 (せりか書房, 1992)
 - 11) Parry, J.Jay, *Andreas Capellanus, The Art of Courtly Love*. (New York: Columbia U.P., 1941) カペルラヌス『宮廷風恋愛の技術』野島秀勝訳 (法政大学出版局, 1990)
 - 12) Rougemont, Denis De, *L'Amour et L'Occident* (Paris: Plon, 1956) ルージュモン『愛について上下』鈴木、川村訳 (平凡社, 1993)
 - 13) Schubart, Walter, *Religion und Eros*. (München: Verlag, 1941) シューバルト『宗教とエロス』石川、平田、山本訳 (法政大学出版局, 1985)
 - 14) Trojel, E., ed. *Andreae Capellani Regii Francorum, De Amore, Libri Tres*. (München: Vilhelm Fink Verlag, 1972) カペルラヌス『アンドレアス・カペルラヌス 宮廷風恋愛について』瀬谷幸男訳 (南雲堂, 1993)
 - 15) Valency, Maurice, *In Praise of Love*. (New York: Octagan Books, 1975) ヴァレンシー『恋愛礼賛』踏掛、川端訳 (法政大学出版局, 1995)
 - 16) 伊藤勝彦『愛の思想史』(紀伊国屋書店, 昭和五十七年)
 - 17) 新倉俊一『ヨーロッパ中世人の世界』(筑摩書房, 昭和六十年)
- 〔脚注〕
- (1) Lewis, C.S., *The Alegory of Love*. (London: Oxford U.P., 1936) ルーイス『愛とアレゴリー』玉泉八州男訳 (筑摩書房, 1984) 8 頁.
 - (2) *Ibid.*, 前掲訳書361頁.
 - (3) Valency, Maurice, *In Praise of Love*. (New York: Octagan Books, 1975) ヴァレンシー『恋愛礼賛』踏掛、川端訳 (法政大学出版局, 1995) 1 頁.
 - (4) Lewis, *op. cit.*, 前掲訳書 5 頁.
 - (5) *Ibid.*
 - (6) *Ibid.*, 前掲訳書12頁.
 - (7) *Ibid.*, 前掲訳書20頁.
 - (8) *Ibid.*
 - (9) Trojel, E., ed. Andreas Capellani Regil Francorum, *De Amore, Libri Tres*. (München: Vilhelm Fink Verlag, 1967) カペルラヌス『アンドレアス・カペルラヌス 宮廷風恋愛について』瀬谷幸男訳 (南雲堂, 1993) 234頁.
 - (10) Lewis, *op. cit.*, 前掲訳書28頁.
 - (11) Capellani, *op. cit.*, 前掲訳書11頁.
 - (12) *Ibid.*, 前掲訳書14頁.
 - (13) *Ibid.*, 前掲訳書228頁-229頁.
 - (14) Huizinga, J., *Herbst des Mittelalters*. (Kroners Taschenausgabe) ホイジंगा『中世の秋』堀越孝一訳 (中央公論社, 1988) VIII「愛の様式化」225 頁-244頁参照.
 - (15) Lewis, *op. cit.*, 前掲訳書132頁.
 - (16) *Ibid.*
 - (17) 吉田新吾『チョーサー研究』(あぽろん社, 1966) 40頁-44頁.
 - (18) *Ibid.*
 - (19) Chambers, E.K., *William Shakespeare. Vol.1*. (Oxford: Oxford U.P., 1988) Chap. XI, vii. The Sonnets.
 - (20) *Ibid.*, p.564.
 - (21) 川西進編註『ソネット集』(鶴見書店, 1980) i頁.
 - (22) *Ibid.*
 - (23) Valency, *op. cit.*, 前掲訳書 3 頁.
 - (24) Duby, Georges, *L'Amour et la sexualité en Occident*. (Paris: Société d'Editions Scientifiques, 1991) デュビー『愛と結婚とセクシュアリ

『テの歴史』 福井、松本訳（新曜社, 1993） 374頁
-372頁.